平成２８年度 学内研究助成金 研究報告書

研　究　種　目	■奨励研究助成金	□研究成果刊行助成金
	□21 世紀研究開発奨励金 （共同研究助成金）	□21 世紀教育開発奨励金 （教育推進研究助成金）
研 究 課 題 名	認知症患者の家族の後悔に関する探索的研究	
研究者所属・氏名	研究代表者：総合社会学部　総合社会学科　准教授　　塩﨑麻里子 共同研究者：	

１．研究目的･内容

本研究の目的は，認知症患者の家族の代理意思決定に焦点をあて，後悔という切り口から探索的に家族の経験を整理し，家族の代理意思決定に際する心理的負担を軽減するための支援方法を提案することであった。具体的には，代理意思決定における 1）後悔を引き起こす要因と 2）後悔に影響する選択の仕方を質的にまとめることであった。

２．研究経過及び成果

家族介護者 11 名を対象に，半構造化面接を実施した。質的内容分析によって，後悔を引き起こす要因は，3 テーマの 10 カテゴリーに分類された（知識の欠如：認知症についての知識のなさ・支援の受けにくさ，家族の心理的要因：本人の対応の難しさ・決定の先延ばし・家族の病気の受容できなさ・先に起こることの見通しのなさ・決定に伴うリスクの過大評価，他家族への影響：周囲への気兼ね･周囲の無理解への対応･周囲とのつながりのなさ)。これらの 3 つのテーマから，家族が後悔するのは，より良い介護ができた可能性・より早く対応できた可能性・他の家族とのバランスの 3 つに整理できた。また，後悔に影響する選択の仕方は，9 カテゴリーに分類された（Table1)。

結果から，後悔を引き起こしやすい特徴として，長期介護の中で，複数回意思決定のタイミングがあり，考慮すべき要因の変化に伴い最適な結論が変わることが挙げられた。家族の代理意思決定に際する心理的負担を軽減するための支援において重要な点は，一人で抱え込まない，決めることから逃げない，患者と家族をトレードオフで捉えない，多様な視点から論理的に考える，その時の最善の決め方をしたことを確認することの 5 点にまとめられた。

Table2. 家族の代理意思決定場面において感じた後悔に影響する選択肢の仕方

より良い介護ができた可能性に後悔しないために
- 信頼・相談できる人を作る
  - 1人で抱え込まず、相談できる信頼関係をつくるのが大切
  - 先回りをして、教えてくれる専門家にお任せ

より早く対応できた可能性に後悔しないために
- 決めることから逃げない
  - 行政サービスで乗り越えられる問題と、自分で乗り越えていく問題がある
  - 助けてもらったり、情報はもらえるけど、決めるのは自分
- 状況が変化することのイメージをもつ
  - 問題が起きる少し前に動くための観察力・情報収集力・行動力
  - 良い看取りという先を見据えて、今できないことを差し引く

他家族への影響に後悔しないために
- 判断の基準を決める
  - 患者・自分・他家族の問題がトレードオフになってしまうと決められない
  - 誰を中心に介護するかをきめて、優先順位をつける
- 他の家族と介護のバランスで優先順位をつける
  - 配偶者や子ども、他の家族との人生の兼ね合いで、妥協できるポイントを探す
  - 患者も家族も両方が主役と考えて、折り合いをつける
- 介護に理想を求めない
  - 1人1人状況は違うし、介護に正解はないので、人と比べない
  - 神経がすり減る環境の中で無理をしない
- その都度決める
  - その時々で環境や家族の形が変わるので結論も変わる
  - 最初に決めたことに固執しない

意思決定全般に後悔しないために
- 多様な視点から論理的に考える
  - 自分なら子供にどう思うかなと考える
  - 自分の心配が実際に起きる確率の客観的な根拠を調べる
- その時の最善で決めたことを今になって思い起こさない
  - 決めた後はあまり考えない
  - 先に起こりうる様々な可能性は考えない

3．本研究と関連した今後の研究計画

本研究の結果から，後悔を引き起こしやすい特徴として，長期介護の中で，複数回意思決定のタイミングがあり，考慮すべき要因の変化に伴い最適な結論が変わることが挙げられた。近接領域の先行研究の知見を参考に，意思決定のタイミングを支援する方法の開発を行っていく予定である。今後は，実際の介入研究の実現に向けて，現場との連携を取りつつ，進めていきたいと考えている。

4．成果の発表等

発　表　機　関　名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)
Society for Medical Decision Making	ポスター発表	2017/10/22-25（予定）